

2020 年度研究協力者の研究報告

研究課題：

- ①中国・新疆地域の造形作品にみる線描とエネルギー形象の研究
- ②8～11世紀における木彫仏の調査研究—浄土宗寺院伝来像を中心として

氏名（所属職名）：安藤 佳香（歴史学部教授）

1. 今年度の研究実績

〈コロナ禍による当初の調査研究計画の遂行に対する影響（中止、変更など）〉

中国・新疆ウイグル自治区はじめ、海外の調査、国外遠方の調査は行えず、比較的状況が安定していた夏期に国内近隣の調査のみを実施した。

〈今年度を実施した調査研究活動〉

- ①奈良・法隆寺諸像調査
- ②奈良・東大寺諸像調査
- ③奈良・薬師寺諸像調査
- ④奈良・唐招提寺諸像調査
- ⑤奈良・大安寺諸像調査
- ⑥木造薬師如来坐像（奈良・東明寺）基礎調査

上記調査によって、飛鳥時代～奈良時代の彫刻群の全体の造形の流れの実態把握に努めた。

⑥の調査によって、空海による密教請来以前のダイレクトなインド風伝播の実態を明らかにする端緒を得た。本格調査へ進めていきたい。

2. 今後の課題

〈研究協力課題の調査研究活動の今後の課題〉

- 1、引き続き新疆地域の造形作品にみられる線描とエネルギー形象を調査・研究し、その具体相、独自性を明らかにすることを目的とする。しかしながら引き続きコロナ禍及び政状の不安が予想されるため、状況を見極めながら国内の新疆関連の遺物を保存・研究している機関を調査対象として研究をすすめていきたい。
- 2、引き続き8～11世紀に制作されたと想定される古像の調査、研究を実施する。次年度は、2020年度に基礎調査を実施した東明寺像に加えて、実施できなかった鳥取・島根県、京都市などを対象とする予定である。

〈宗教文化ミュージアム行事（展示・公演・講演会）への協力予定〉

2021年度の冬期企画展にて研究成果の反映を予定している。

研究課題：浄土宗と戒律

氏名(所属職名)：齊藤 隆信(仏教学部特別任用教員(教授))

1. 今年度の研究実績

- ①近世浄土宗における円頓戒の復興に貢献した増上寺第45世の成誉大玄の『円戒問答』の校訂本とその解題を完成させることができた。本書は後に撰述される『円戒啓蒙』に先んじて成立したテキストで、大玄の円頓戒に対する先駆的な理解を知ることができるのである。本書のテキスト校訂と解題は『宗教文化ミュージアム紀要』17号(2021年3月刊)に掲載した。
- ②新型コロナウイルスの流行により、当初予定していた東京・大正大学図書館での資料調査を断念せざるをえなかった。しかし、その調査旅費をもって浄土宗の月刊誌『和合』において2年間で計24回連載していた「円頓戒のある暮らし—現世安穩のために—」の印刷製本費に充てることができた。本書は円頓戒の歴史と思想をはじめ、梵網戒のすべてを解説し、あわせて浄土宗における円頓戒の目的や意義について整理した成果である。製本後に関係者に配布して意見交換を行うことができた。
- ③年度末にはシンポジウム「円頓戒—いかに伝え、いかに持つ?—」(2021年2月6日)を開催した。これまでの円頓戒研究は、その歴史と思想を解明することが中心点であったが、それらは概ね達成することができている。そこで、これからはこの円頓戒をいかに他者に説き伝え、いかに自らが持ち、また他者をして持たせるかが問われてくる。このシンポジウムはこうしたことに焦点をあてた初めての試みである。

2. 今後の課題

- ①大玄には他にも『円戒講義』と『円戒帰元鈔』の写本が遺されている。これらの校訂テキストと解題を作成し、従来の成果を含めて大玄における円頓戒思想の全容解明が望まれる。
- ②今年度のシンポジウムの趣旨は、円頓戒をいかに人に伝え、いかに日常的に持つことができるか、あるいは持たせることができるかということであるが、これまでにこうした趣旨で開催されたシンポジウムはなかった。今後も宗派や戒の内容の相違を問うことなく授戒や布薩の現場で活動している実務者や研究者と図りながら、より理想的な戒の伝え方と持ち方を解明することが課題である。

研究課題：広沢池を中心とする平安京北西部郊外の歴史と文化に関する基礎的研究

氏名（所属職名）：佐古 愛己（歴史学部准教授）

1. 今年度の研究実績

今年度は昨年度に引き続き、広沢の地にかかわる、和歌や文学作品を調査し、平安・中世における貴族の日記を中心に当地の歴史に関わる史料蒐集と分析を中心に調査研究した。なかでも令和3年度のミュージアムでの講演会や展示関連の（「広沢池」に関する）和歌や文学作品の調査、和歌が詠まれた歴史的背景や景観の変化、さらに広沢池（平安京北部郊外）と天皇・貴族との歴史的関係を、平安時代・中世における貴族の日記などの文献史料や絵画資料などを活用しながら調査を進めることとした。

刊行史料や資料館等のデータベースからの史料収集に関してはおおそ予定通りに進め、史料調査・蒐集を予定していた機関のうち、京都府立京都学・歴彩館に関しては、秋学期に訪問して調査を実施したが、国文学研究資料館など東京に所在する史料所蔵機関に関しては訪問による史料調査は断念し、代替措置として複写可能な一部の史料については紙焼きを入手することとした。

その他の今年度の活動実績として、以下の2点を上げたい。

① 2021年度開催予定の講演会の企画案について：

おおその企画案を作成した（2021年度の9月開催予定）、テーマは「（仮題）嵯峨野・広沢と和歌」。講演会は歴史・文学・景観の3つの視点からの報告で構成し、歴史関連は佐古が担当し、文学関連には上野辰義先生、地理学関連は長谷川奨悟氏のご協力を得て、3名による報告を企画。さらに、広沢近隣の高等学校のご協力を得て和歌（短歌）を募集し、コンテストを実施予定。和歌コンテスト審査ご依頼のため、坪内稔典先生の招聘を企画。

② 『2020年度 宗教文化ミュージアム研究紀要第17号』への投稿：

京都府立京都学・歴彩館での史料調査の際に入手した史料（『諸位記備忘』）に関して、史料紹介を投稿した。本史料は奥書が記されておらず、成立時期・執筆者未詳の史料ながら、断片的な情報と記述内容から、菅原道真の流れをくむ五条家傍流の桑原為政が大内記に補任される前後（天保13年（1842）正月22日以降、同年12月13日までの間）に著したと書と考察した。

2. 今後の課題

2021年度の9月開催予定の講演会「（仮題）嵯峨野・広沢と和歌」準備を進めることが最重要課題である。広沢・嵯峨野の歴史に関する報告内容をまとめるとともに、和歌コンテストの募集やコンテストの実施方法、講演会全体のあり方などについて、諸方と緊密に打合せを行い、コロナの感染状況にも留意した対応を考慮しつつ、開催に向けて準備を進めていく。

研究課題：中国貨幣文化経済史の研究

氏名(所属職名)：宮澤 知之(歴史学部教授)

1. 今年度の研究実績

2020年度に計画していた出張調査はコロナ禍のために中止せざるを得なかったため、2021年度企画展の展示計画の取りまとめに着手した。ところが、12月より体調を崩し、やむなく研究を中断している状況にある。

2. 今後の課題

2021年度は、これまでの研究成果を総括して公開する企画展を春期に開催することを予定しているが、病状の回復が遅れており、開催時期の変更を検討している。

研究課題：「現代日本の民俗信仰と民俗芸能をめぐる調査研究」

氏名(所属職名)：八木 透(歴史学部教授)

1. 今年度の研究実績

2020年度に計画していたフィールドワークは、コロナ禍のためにすべて中止せざるを得なかった。なお、次年度以降の調査に備え、2万5千分の一地形図を購入した。

当初の計画にはなかったが、9月に「祇園祭綾傘鉦」関連の特別展示を計画し、公益財団法人祇園祭綾傘鉦保存会の協力を得て実現させた。

2. 今後の課題

2021年度は、コロナの影響を注視しながら、可能であればフィールドワークを再開したいと考えている。まずは2022年度に予定されているシアター公演、「芸北石見神楽の実演と解説」の事前調査として、北広島市への調査を計画しているが、すべてはコロナの影響を見ながらの決定となる。